



# 「札幌」の名を持つ昆虫たち

昆虫は地球上で最も種類が多い生き物で、全ての動物の3分の2を占めています。1993年の時点で95万種が知られていますが、一説にはこの10倍以上もいるというのですから驚きです。日本でもこれまでに3万種近くが記録されています。

「札幌には何種類くらいの昆虫がいるのですか？」という質問をよく受けますが、十分な調査が進んでいないため、実際は、誰にも分からないとしかお答えできません。

普段、私たちはモンシロチョウなど、ごく一部を除くと学術的に通用する名前(和名や学名)をほとんど知らず

に過ごしていますが、昆虫の名前には私たちの住むまち「サッポロ」の名が入っているものが意外に多いので



サッポロフキバッタ

す。たとえば夏に山地の林道沿いで見られるサッポロフキバッタ / *Podisma sapporensis* (和名/学名)は最も目にしやすい「札幌」の昆虫です。1989年に出版された「日本産昆虫総目録」によ



ジョウザンヒトリ

ると、和名に“サッポロ”

の名がつく昆虫は29種類あります。一方、学名に“sapporo”がつくものは79種もあります。昆虫の名称に登場する都市は「東京」が27種、「京都」25種、「大阪」10種などですから、札幌に由来する名前は他の地域を大きく上回っていることがわかります。

その上、蝶・蛾の仲間ジョウザンヒトリの「定山溪」、トンボの仲間モイワサナエの「藻岩山」など、市内の地名に由来するものを加えると、さらにその数は増え、調べた範囲では108種の昆虫が札幌に関連した名前をもっています。

なぜこんなに多くの虫たちに札幌や札幌ゆかりの名前がついているのでしょうか。その理由として、札幌が定山溪、藻岩山、円山など昆虫をはぐくむ豊かな自然に囲まれていること、そして、明治以来、北海道大学農学部を中心とした研究機関があったことなどが考えられます。

市民の皆さんと一緒に札幌の虫たちを調査して、いつかは「札幌には 種の昆虫が生息しています。」とお答えできる日を実現させたいと思います。

「ミュージック・レター」は、博物館 (Museum) の語源であり喜びを意味する “ muse ” と通信を意味する “ letter ” から名づけた交流紙です。

特別寄稿 博物館探訪・スミソニアン博物館

# 現金で大西洋を渡ったスミソンの遺産

北川芳男（元北海道開拓記念館学芸部長・理学博士）

スミソンから遺言状を託されたハンガーフォードが死去してから間もなく、アメリカ大統領アンドリュー・ジャクソンに宛てて一通の手紙が届けられた。そこには「ジェームス・スミソンの遺言により、彼の遺産をアメリカ合衆国に寄贈する。首都ワシントンに、スミソニアン・インスティテューションという名称で、人類の知識の増進と普及を目的とした施設を設置してもらいたい。」と書かれていた。大統領は、1835年12月14日、合衆国の議会に対してスミソンの遺産を受け入れることについて話し合いを求めた。

アメリカ議会は、突然の話題に議論が沸いた。まず、大きな問題は、スミソンの遺産を受け入れるべきかどうかということ、そして、スミソンの提案内容を受け、どのような施設を造るべきかということであった。

第一の問題、遺産の受入については、1838年

に承認され、大統領の代理人、リチャード・ラッシュが、スミソンの遺産を受け取りにイギリスに渡った。しかし、当時はまだ外国のお金を銀行を通して受け取る方法がなかったので、遺産は現金で運ぶほかに方法がなかった。遺産はおよそ10万ポンド（約50万ドル）、当時の1ポンド金貨で10万枚の量であった。ラッシュは、厳しい警備の中で10万枚の金貨を105個の袋に入れ、大西洋を船で渡り、帰国した。持ち込まれた10万枚の1ポンド金貨は、さっそくアメリカの造幣局で溶かされ、アメリカの1ドル金貨に造り替えられた。

今も大きな謎として語られているのは、太平洋を渡った1ポンド金貨のうち、なぜか2枚の金貨が溶かされずに造幣局に残されたことである。この貴重な2枚の1ポンド金貨は、1923年6月、スミソニアン博物館に移され、今も謎とともに大切に保管されている。

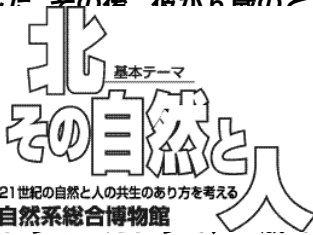


## 人物伝

アーネスト・シートン  
(1860 - 1946)

カナダやアメリカの広大な自然を舞台に、動物たちの生き生きとした姿を描いたシートンはイギリスに生まれました。その後、彼は6歳のときに海運業を営んでいた父の死により、カナダへと移住します。体験し、大自然の中で成長しました。

父親は彼を画家にし、肖像画家に弟子入りし、オンタリオ美術学校を首席で卒業すると、さらにロンドンのロイヤル・アカデミーで絵の勉強を続けます。日中はロンドン動物園に通い動物のスケッチに精を出す一方で、夜は大英博物館で博物学の本を読みあさったといわれます。動物に対する観察の精緻さやスケッチの確かさはこの時期に磨かれたものです。



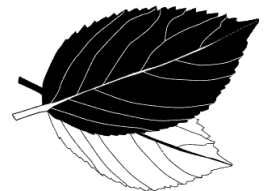
転機は1898年、彼が38歳のときに訪れました。若い頃からの野生動物の観察記録をもとに『私の知っている野生動物』を出版したところ、これがベストセラーとなって一躍富と名声を手に入れます。その後も「オオカミ王ロボ」や「灰色ぐまワープ」など『シートン動物記』として知られる動物文学の傑作を発表しました。いずれの作品も大自然を背景に犬や狼、熊などの主人公をかなり擬人化して描いている点に特色があります。

また、彼は自然と調和したアメリカ・インディアン生活に多くの学ぶべきものがあると考え、青少年の自然教育にも力を入れました。これがのちのボーイスカウトの母体となり、自ら初代団長を勤めています。

晩年は、ニューメキシコのサンタフェに移住し「シートン研究所」を開設して、後進の指導にあたりました。

(参考図書：「シートン伝・燃えさかる火のそばで」「シートン動物記」ほか)

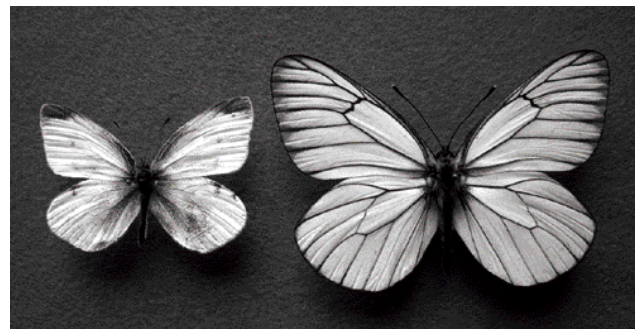
## 札幌自然誌考



## エゾシロチョウ

木々の緑もすっかり深まり、夏本番を感じさせる季節になりました。この時期、街中で白いチョウを見かけます。白いチョウというと、真っ先にモンシロチョウを思い起こしますが、これに替わって日本では北海道だけに分布するエゾシロチョウが目につくようになりました。なぜ、最近エゾシロチョウが目立つようになったのでしょうか？

モンシロチョウの幼虫は主にキャベツなどのアブラナ科の野菜を食べて育つため、畑地が減った市街地ではめっきり見かけなくなりました。一方、エゾシロチョウはサクラやリンゴ類などバラ科樹木の葉を食べるので、人家の庭先や公園などでも生きていくことができます。その幼虫はモンシロチョウの「青虫」とは異なり、黒と茶色の「毛虫」で、餌となる木で集団生活をします。時には大発生して葉を食べつくしてしまうこともあります。



モンシロチョウ(左)とエゾシロチョウ(右)

札幌の都市化、住宅地での園芸ブーム、それらがエゾシロチョウの存在を強くアピールしているのかもしれない。

《訂正》

前号の札幌自然誌考で、「原末次」とあるのは「原松次」の誤りでした。

お詫びして訂正いたします。

## 夏休み体験学習会

### 昆虫採集

日時：7月28日(土)午前9時～午後4時(雨天中止)

場所：定山溪百松沢

対象：小・中学生(小学生は4年生以上で保護者同伴)

定員40人。

教材費：1人千円

### 化石採取

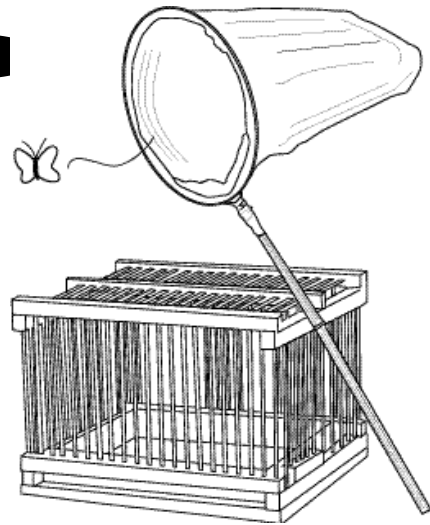
日時：8月4日(土)午前8時30分～午後5時(雨天中止)

場所：空知川(滝川市郊外)

対象：小・中学生(小学生は4年生以上で保護者同伴)

定員40人。

教材費：1人千円



#### 申込

ハガキかFAXに、行事名、住所、参加者全員の氏名、学校名、学年、電話(FAX)番号を記入して、7月21日(土)必着までに、多数時抽選。申込は市民文化課まで(1ページ参照)

## ミュージアム・サロン参加者募集！

開かれた博物館づくりをめざして、「ミュージアム・サロン」を開設します。このサロンは市民をはじめ愛好者や研究者などが一緒になって、博物館のこれからの活動を考え、できることから取り組んでいこうとする場です。“自分の展示をつくりたい” “創造的なことをしたい” “経験や知識を生かしたい” など、“博物館が大好き” なあなたの参加をお待ちしております。

活動内容：ワークショップ、研修活動、調査活動など。  
月1～2回程度。

対象：18才以上の方。

定員(公募枠)：5人程度。

応募方法：A4判の用紙に住所、氏名、年齢、職業、電話番号のほか、応募の動機(400字程度)を記入し、7月30日(月)必着までに郵送してください。選考により決定します。応募は市民文化課まで(1ページ参照)

#### 編集後記

いよいよ夏本番。高温多湿のわが国には、古くから夏を乗り切るいろいろな知恵があります。万葉集には、“夏やせにはウナギを”と薦める大伴家持の歌が登場します。

ついエアコンなどに頼りがちですが、暑さ対策にもエコロジーな発想が必要です。風鈴、金魚、花火、怪談など、一時でも暑さを忘れさせてくれる昔ながらの知恵を取り入れてみてはいかがでしょうか。(も)

